資 料 集

第十二輯

葛西善蔵・原稿「姉を訪ねて」

目 次

解説 葛西善蔵原稿「姉を訪ねて」 裏西善蔵・原稿「姉を訪ねて」

葛西善蔵・原稿「姉を訪ねて」

食物人 1. 2 10 酷 古寺 1 10) 置 拉4 え .|x 和山 見 t" 京 1 竹胃 7 9 F IK 丰 時 H 时 27 5 声 4-1 園 t 件 £4 体 \$4 ŧ た。 ***) 12 スー x 九口 9 2" 199 雜 7 78 14 14 100 惠 t 灾 4 焦 生 : 4 茶 好 t 園 な 8\$ 九 學 禮 值 9 9 1 14 7 安 5 2 64 14 十 ¥ 11 2 走 7) 9 ti 70 立 12 2 华 玄 5 Z 6 た A * 2 4 To * 村 2 表 號 1= 林 是 望 2 杨 0 2 た な 0 3 4, 破 12 12 3E 5. 东 11 额 7-11 1 ik 65 E 1 写正 琼 No 2 世 9 1 暗 b 移 21 な 4 な 借 文 击, N な 4. 2" + 2 財も 77 咳. 1 不-社 7-あ 4 4 5 安 西巷 誰 3 法 0 小 A 200 な 智 な 九 1= 弦 th 12 程 数 · 编》学三人

2.

17

老

船

*

d

比

2

t ...

便

2

記

te

9

21

7

左

+

٤,

3

4

44

な

1

压· 有

4

な

時

ゎ

u

Z

to

t

九

14

+

4

72

5- =

x

E

九

たい

7"

な大

8

本

46

7" 2

曝し

尚

1=

3

4

な

社

ph

出

ħ

0

2-1

大文

女

27

酒

主主

金

E 3

2

to

AF

老

4

右

2.0

2-

+

*

2

支

同の五

年

建長

专

2

来

t

9

27

あ

2

飞

46

2..

2

か

太

走

9

P

休

3

27

=

1=

#

٢ てて、社会 志 在 军 Y 魔 仕 9 太 を 44 度 ち 直 1500 0) 3 1 太 3 尚 21 4 寺 麻 惠 か t E .7" 1 4 北 食 神 寺 あ = P 9 2" 1* K = 4 h 美 2 老 + H 两 4, 淮 Z 来 園 九 40 9 卡 3 4 首 7" 9 ٤ 车 産 電 iI 本山 强 * 出 ŧ 12 (4 27 暗 2. á0 ~ EP 9 北 幕 节 + 記 t 7" + + 10 L E 4 7 打 6 直 5 * 4 3 は 4 12 3. 2 t 4 2 時 争の 0 4 な 8 1= 1 未 苏 2 1 E

刊行にあたって

るために、隔年で「資料集」を刊行しています。青森県近代文学館では、本県近代文学への理解を深め研究に資す

貌は明らかになっていませんでした。本資料集の刊行が、葛西善蔵 ねて」を収蔵することができました。この原稿は、これまで古書店 宰治・明治高等小学校時代の学習ノート二種「豫習用讀方帖」「入 第九輯『北畠八穂草稿〈「ホーイ」ってあの返事。…〉』、第十輯『太 未発表作品集「月下点」他』、第八輯『寺山修司草稿「狂人教育」』、 坂洋次郎・原稿「マヨンの煙」』、第五輯『太宰治・旧制弘高時代ノー 筆メモ』、第三輯『太宰治・原稿「お伽草紙」と書簡』、第四輯『石 研究のさらなる進展に繋がることを期待します。 の目録等に一枚目の写真が掲載されたことはありましたが、その全 う定評がありましたが、当館では平成三十年に直筆の原稿「姉を訪 刊行します。葛西善蔵は現存している原稿の少ない作家であるとい を刊行し、全国の研究者や文学愛好者の方から好評を得てきました。 ト 「英語」 「修身」」、第六輯 『青森県近代文学年表』、第七輯 『今官 l · これまで、第一輯『有明淑の日記』、第二輯『太宰治・晩年の執 本年度は、第十二輯として『葛西善蔵・原稿「姉を訪ねて」』を 運算」』、第十一輯『太宰治・旧制弘高時代ノート「化学」』

上げます。 刊行にあたり、お力添えいただきました関係各位に厚くお礼申し

令和三年三月三十日

青森県近代文学館

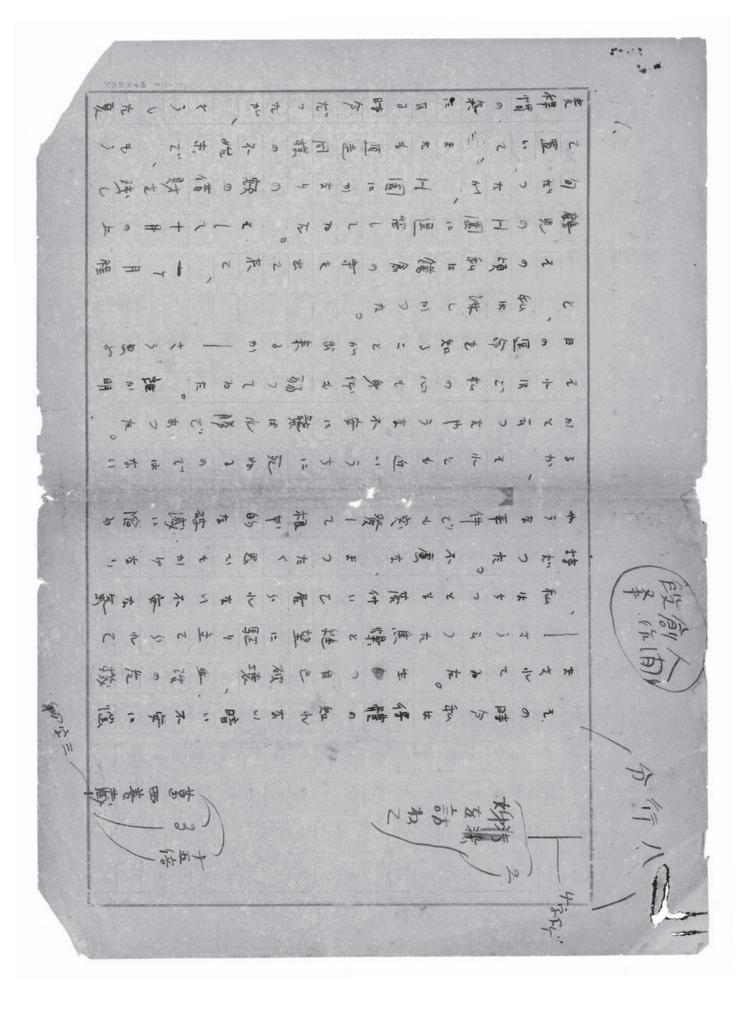
『葛西善蔵・原稿「姉を訪ねて」』 凡例

□葛西善蔵・原稿「姉を訪ねて」

十九枚目の中央下辺りに存在する「左り」という書き込みだけは赤インクによる。ペン書き(インクの色は黒)である。余白に見られる書き込みも基本的に黒色であるが、二十五枚にわたる。各原稿用紙の左上余白にはナンバーが振られている。全編を通して神楽坂山田製の原稿用紙(二○字×二○字、サイズは縦二六○ミリ×横三五五ミリ)

□「資料集」の構成

まれたナンバーと一致するものである。収めた。各原稿写真の左側に〔1〕のように番号を付した。これは、原稿用紙に書き込収めた。各原稿写真の左側に〔1〕のように番号を付した。これは、原稿用紙に書き込本資料集は、原稿の写真版と解説から成る。原稿は写真版で掲載し、縮小して一頁に



つないかいとしましましました国 ことをしたもれないなってなるはなりをはな なしなといいかな大きくなってかられるい マルがなる、小にけを呼いわるいニともし てかりむいなのであった。すると、 出すれに そんな、はかまなのび、大きを整す は三人が西を飲み合った時に 耳の虚い老神 のなりをしなるいとのはいなりと 日本で、そのお太皇の方は今とこにのます の五十年を連長手へ動めてまたのかあった 在のある書で二十九の東まで書してなれれり 太童血麻节 6 ある事へ、如於すんは小田写 い事の友生と二人ではたへつかいかと来る 老細形をしは養魔の産りが、七つの時に同 ことがあいはまれて、村は暗い見ばになった び、館見を後って来る電車の中でもふともの 我がその時でかなり強く印象をかてみたの 後食のお手の老におそんのふとした来の上 意したのであった の仕食のお、でけ園を出て、北谷直への縁を

村からば事にまった。車器かり田園砂しに来 春世加八時の連絡能に無るべく静早く妻の ひ着之来な軍を施に直させたりして書 深里の事の実はで 一年はりできまとと食 かなり強く動いてたないなること て比世の戦とかしちろるこれかうな気持せ かったしまなわせいまでなけない外に管う 一大を盛していしてうるなどのかれるほし を離れてもはの意の中が短い話かる作うと のえの娘のことを思いはしてるたまへ前官 出しいとかいれの書上りまからを行ってとと 意の性についまるなりなっていてないのと の大産祖他人元日能路しりむは後ろの車管 朝山で付く 川圏の上陸、欧の朱福、銀符寺 いるない 市野に 一十八回なから 降し、暗いるか投げ 文十八に似る記を得まれるた。利益の省事古 どくをわるいことをしたんですかの、とは みになって言った。

200周年初庆秋年代旗甲舰上出了为在中 かびあう在中盤は城をあるる時の一時の住 ていくのなが、この日本はく曜からはは後 の半ばとるのともう地震ではれの末となっ 書奉前八時日紀 正九三等官 ——十月 क ड मेर मिंक न मह ए मेर 窓り、此のまりなかりした感恨 しばくししと、かはまではいてにくなのなるま いりとしなった。四いこへ行っても不幸はか 主席をしてるので表のなく日本事がな りょの母をがをしてまないった。私は録りは めかりの時も一度なの時でなったのど、初は ると体向に能を経を後んでるるいか 親心でゆる在でてして此版生華期的なりの書 書のに自身も智書かいく付金を提い己原原理に このはないなるの数は屋と出っているといい 七心寒中島性の腹膜で配んでるる最の新 へいかた前の手に事の味の手児の帳が二人 東北京しに妻のなにむった不事はことが来 のなかれなりではたりに、この上

1,

ほと強量のとのよのなななに、一般の最れ南 出来るのなりするるとなるなけのは、此次の度 かうした自動の中にないひんひり 記むことか 自ちにいったって 自下のなのより一つで自由に 大きく無同のな魅力をひて動いてある の死ないの指やはしないのかこの意り深く な気持つ眺めてわた。自勉はいうだって、私 の堪かを感じながり、をきり入れられる い波の大きなうねりを私は都を枕にかなり 異の興化が眺めてみたりもの時でと同い意 ある意人は一里片の散るのも 恐怖といいる ら松室の私店かりいかりに大きくうゆって 出である私堂は一校の七本にくるまりなか つなかかなり世となるのである。なしいのい をではの意い時間からなので 室蔵までだ は十七の時で、その時は太堂と二人だったか かその時方の記憶はほとしとないこ在人目 時代に一体を関りと後去国の素都に避難した あった最かはかの三つの事かの你の倒産 知かこのは城を野るるのはこれで三度目が

らいまなしたりと、三角型に管立した別かちらほり見なしたり、はなくかってあるとかんりした。このといってあるはなしたり、はなくかってあるはたりした。この是か、肌を探が大演般相手に使れて容の向に、かうしたをはかた

せる。近後はあの埋き右に曲ったところですりかいなかはな人ント電社が何り、使筒ではした。上

方の何りの運ぶ用は、おかはもう過<equation-block>ですが

からしいるでも山

うっと差かてたないしたか、いち中はかれが、かない、なる中はかりない、かない自に管かましたら、此る中はかりまとんな、和は十月ばかし前にも一度乗ってうでまとれ、なかくことなり、ことなり、かれて

「り」ないかのはとれてならかでした。 かられるないないないないと似まなられなら

京北京 我 好。

ごあった。「事な、「事味を見ずると、私は甲

7

で産るまれ、どっちのたへ出かけますから、 में ० म् 彼は英人の歌慢や独定の前状について私に 色で産めて、するした私に来ったのであった 田が一人あると可つた。遊館の高級文献を中 国ーとい様まで乗るのであった。小僧に変 第二章がりでなるになり 欧州惟のはの屋と説:其り上いで 今度事 小 配長とは見てるたか、後は二十で、教後の える 色白の九般の浮眼の男 ― 秋は最初か 禁に何かなって戦後し、二十三位のには見 士の諸電を姿を東京かりまりかたかと標 すかに日子曜なるかかり主美しかつた。蝦夷店 機合権をいの自然のましの林の江東は、さ 多少の呼ばをかい、た大ない園の根村や、 か、おはり北は直りしい祖野なは縁の風景は あったればけ近のかうな愛傷を此かはない のであったこの様に戻るのはなははあてい らすぐま在連接の選出他川行きの列車か出る

一時半に船の扶稿に横付けになり、ことの

N 2 在人间的前日本中日本人工本馬很在記 日本」ながな 国しるこの世界の大学人ないでい もりでしたが、南へとしてまかり壁がとる思 一日またこの食」の同かをしたりと思う すうごしたか・・・・それまめいつかなかった なっとのなならいないっとして 节高、松林、红珠川淡里大い东京京京 あまたのるのいる意味をはく彼は私いた 有態度のこれなるととととと はもう主候に管機のは私た一人前の男のやう いるかを手方でもりておます」と後 魔的ます 私之州旭川い南書をもって いに虚ないかもしますかりをもりを乗りは から何ないな田一人なといいちか、れまる 本、让くわってる高度ではありませんね。 え い人はでは具体を める年機ををして来ました。私きのやうな弱 いか、寒は似葉りは変めるつもりです。陰 白と、私は私いたの

の一帯が自力を自由しい、財かられる。有か 目の分下小村寄せした大海主教之工費火門 したあたりの山野にも温を秋の 森曜に着いたのは四時頃でうたが、意なと する一十月十日十十四十一日三十一日 時計を入出して見せて、同これは母への土を生く トがラスの裏に十年の七段のある小型な限 金にすると四日後のあいですからとるっと こかは独立かなってまたのですか、日本の の雀とおり奏ってるまんかうなど終えずす しいった、彼はれに発明を高自力大は名物の財 が有力に彼にようした印象を與へ「夏」たり 幸のんり、信り、素ををはなるのとりなる と私は軽い徹然の感じといた。まに、村か 中一下こるいなけるなのではないかと思り 素なな正血素調子であった。

りょうはけりなくのかしのは本をも足

生かしたりしてるからなられたからいとしたか

6

のうかなとろうとれた。私は一般性事の生をを 無俗なりなれなかった。彼は一定の你者 ミラン産がはしの食を借りて行うたのだが みりのだかり 向うへ着くとすべ、送る山町う 宿る出し行うた。可様でななかことになって る日初かり森へほる旅奏を借りてるっと下 かたのか一人で下宿に民族ってるたが、あ 二十四五の仕土徹慢が、どうして一行にはか してわな時でなったがをこで一十紀につた と母の人の一個なるが、ことの一一個一の一里に は寒後の果の美ヶ月のを風の私人に野に動め 在實局即問情好賣人之私 料等の重魔の町にの直然の思い出まるしょいか など野婚郎のて特別を注意を動かされた。 仕上の祖末をいか くしをなや、小さを機構 宣の小松何にも選師町かしい虚じのを事が いところは町んまところか・・・・」と私は事 毎日は総が往復ししるるの可は、森と云 東に同い大やうに関うた。森田と皇衛の向は か皇衛門の健信をしればありかの書

1

かり、利はいっしょにあはに行ったりしていると三十をあるな人向ではないないうか、てからなるとうかなっていなって、後者なってるものはすべいこれならたとは思ったが、ビニが社をしてかりをしていないには、いいなななられいしょしてのとなってのとしなっていいましてのないによってのとらないなったしなっていいましたとうかにはなくないなったしなくないになったい、ほとしどを生のまうのうなどろったが、ほとしどを生のまりのによなにあったれ、の役は俗異なる関節をのや

- 成権かの女は角なの提付を持ってるた 初の午り、香やまりはくるやりい取って、 でかすとはとなるとはといっていいとないで 旦切方の治れるかうまうちはこの町にはない おいての角のうちかなうですと、まかには そんなりわしかうちへゅうておくいをさい は、で、そへた。 すうだーーー」ないなの様子に東まっける いやうまりかいなった 国門は今夜が治りになるいでせるられと かうにして素と した問神半傷のない後ろかり私をとしわける もなれて人を近かいかも来てある風の三十数 異なりを出て行くと、改れ口のちゃの押に かんよりのでかるのできないないないない 知は記と書様の眠の害をで買った能の経 該相手れったかの青年と、別かの直蒙を立め

00

海々した眼体の聴いせであるか、もう一人 な。層種の皮酸の、鼻が小さく調産を強いた 相心给小夏至四雜你一院之在 福里心盖教长 具部二小かいまなこの次かの十一時半の一性 出来ますとれまな早いしてするちしは からきすまとるわりに記いた。 慢するかり かなり実をを感じてるたので 重ねというなりとを持つて東在還に相定を かないか、住費が出来るかなる、好知は過記を に来ご精電は扇まして表たいかか 酒を飲 とりなってる大の 五大人の強りないあるかろれいもういっ の大量はななはるれるいをなななった んな是方かしてあるからだが、直まれた二階 更に地で室のやうに様子かあったりして、へ べた待会所になってのて、一階とりのた下に かうスタの中がむいトーブレに持みなど並 先を立ってまぐるこの角のうちへ等か

4

南季ましたいかれ、うちの且利はこの量のこ 下川なるがいしちんてこの自せお客をしり、 ろななうで、特所によっては一つ手前のけど かれ、何かと川とるところは虚ら産いとこ そしもなこの見はちゅういまく起りませし 元小はもう同に位せて仕屋をしますとえる かりには産りて見り のよるないなることをしたなり 知ら 見に向明日は一番 しちは四十美小松 と南いてまたい、作なないあるところか ごもころは怪事坊りかなりある り内の停車坊で下りなりいしんだいられば何 2村のことをひところへ行くしだが、やは 旦那あしたはいちょへ立てなるしかねら山田 のを脱に並べて持って来た。 時後れの犯難の施りなりまったやうなも 手料理の生のりか、ホャ、ロシラスの刺り 面所で競など没ったりしてみろうかに、大は ところかあると思った 風をがあいので 浅 出て来た者いなと歌へし、年なけに如大ない

まずす。こしなとこのご野しなにしてみたう 「いや一町まかりだわれ、また主意も出わり 一番を出りるのかをなる。 そりわちつであわにもなって世でいましたさい そんな風物とうかほどのものではないか その人が且们でったとるかなれるこれ いるかくく金を乾しては一無虚骨を胴子が もかつはし事をのしかれると、かの女は家っ かない、且仍だった。これなりま なっなかね、あっかかは陰の世紀に在ったけ おかな、かはりはないところんしてなないところん人 いこの二月ばり上前に横たりになったばかし すうわる、且印は時後の人かな。わしょつ をは寝をなならり するのる。且印はお風はいちられたらは いわ、一十親戚のものかをうしいないに表 すすりとしのかっていいるはれるでし ては詳しいかり、明日の別よくないしまいま

女か十一時半の文件に出る出に、知は思か 感いないでありる大 いかされる 私はこの様だ女に一種の配としる ひいかのあかなりく姓えようて来るやうな が赤地色に時の出て来た熱や眼付きに、軍 るりを断げのことを、珍りしかを胸みであった いけるかくありるっても一年まるんか東子など 46、またみ供もあいむりにも用ってあるのだか 強力するはと、女は如何にも居托のなすりう い一点をなんで、旦神、スリカとうくの首の日 国民人とに ご本本のをいのかれる。山 かかからはないなべましとるかだけなり あのチェム人でかりして冬中カラ春にしてる するでする、あれかす、且即あしかるする 我のほのの一十五六の子から、一 害の子がのなびせらか・ーーのり見をさいない 且那が殺主法かに行すなさって時報送か塚に てまるごかう東はですかりないししてって

のおとないたご到書してかし恢復しかけたと手を使いて無財産となり、その役かはり所科さればいある。最初的産倉社のやうまものでってかほけは、私たちは十七八東も倉はかに来たのだりない、私たらをは一重を除ってかりとるかがしたなりまながりはか、私はらればした。特の良人とも、私かけか、組みなりを得ってあなりとなり、他かけか、信号はなりを集けした。特の良人とも、私かけか、住ちなりを集けした。

しるた。十年代時の下の陸掛び上へ第一触のないら、教徒かたすとの電見を致に描い難が仲での母性成人の確すなどしてあるのを行の様子れ、ストーかを囲いだ土をりしい一トーが返ればない、後人を放えてあた。特住民トしいった。 魔然い事宣の中のかい小さな婚額の又小澤と岩瓜の九里館りの自は軽便懲追がありまとれの七里館りの自は軽便懲追があ

に直入ったのが慢して、明日の早をまままにしなが、まかわって、実際地でまかいはがったので、生時あって、実際地でまかいはがったので、生時

00

早批に負合のはほとに貼けて了った自ながれた。 たけなり 在りはなり 在でかった。 のかはわけり記をびるとなって。 のかはわけり記をびるとないた。 なんたびか、しいし生堂する程度のかた。 傷見 道美 久東 の私の償れなり はられなりはくり はいなり はない になして、 生しないとうないとうないとうした感じした感じしなりった。 しゃしまけいはあった。しゃしまけいはあった。しゃしないとっした感じしなりった。しゃしままではよるい

おが見らたりして、初の地でのやうなコセくくなか 見えたり、新菜のかなりの香の食が あるり、 この向におりりあり 「「「「」」を達したまり、「「」」を傷って、猩いてみる魔にがか、 ていかをく 上田で眺め 「高い空の足える山など後したりしてがなったのははなったのは 「まりと見ったいし、はいなかったのだ。今度のこれにいい、はいなかったのだ。今度のこれにいい、まかなり、なもったのだっなった。

王のでは、佐々れとるりは供い、客校へ にかは教へりれてるたっ 町難いた、そこのよびの前を左りにあるやう 人うかだったのに色付いた。信事坊か、五六 足切がりいて作った。今校園かの小使の五六 活的 新鲜有方的在心室是我色眼的春秋 ないい あ年に乾とらみをさけて、朝の日を 上國田中間の中國日本語の世界 に南側においくと同を置いて往来り、引 さばった。和は信事場が回山田の路を東直が たがなるうてもほどいど二里田市の管 信事場がし私はてへの大作の方角を狂い まりかく女なのだ 世かは底でない、年しい屋屋のものかは ことは出来ないのだ。成親といってもこの をいのだ。思りく和は二度とは訪れてたる 裏様 - 和はわるい何處を茂して来てはなり あった。入し、かりのないからない数とや機にった。(特かは)、 になるだりとれはほびくも思いついたので 上灣なすの名のにい、印象をなってなりこと

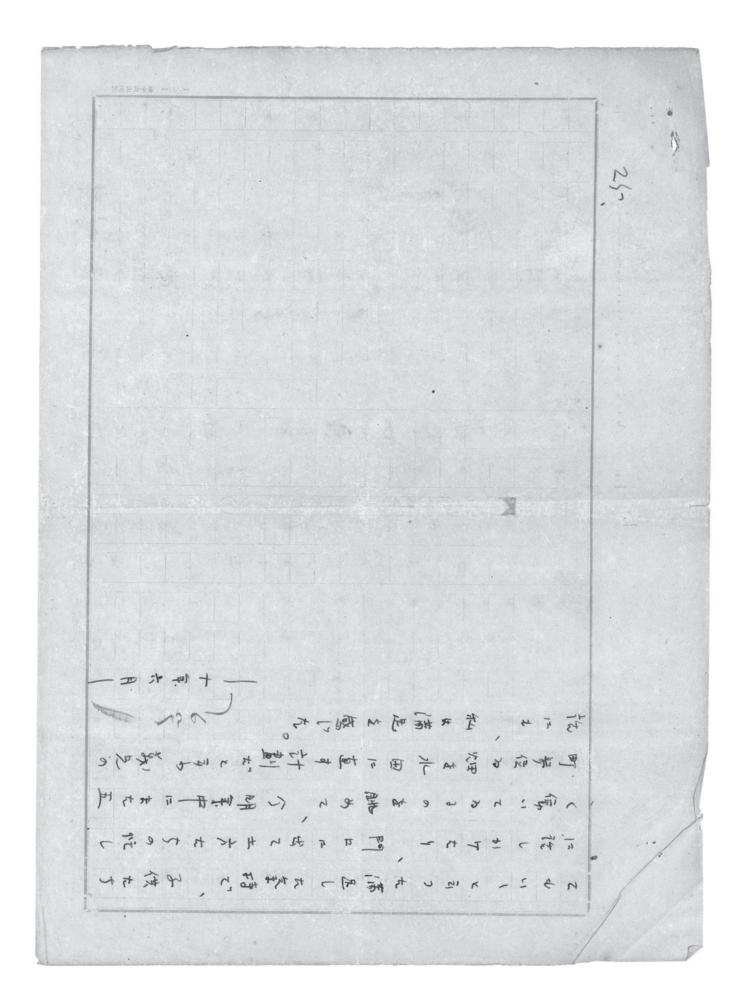
なり、トリたところにないあり、なの様に水 りが半町はいしょといといればれなら た役場は駐在所などもずった、ナラしたら お残の附近には一十した信でなど並しでの 在的《同は二人とも見えてないと云った の子に被いた。か小佐はしばりくして出しま のご題を被の前まで来た時に、かうるうとな 能報の子に案件をせたとるか後を高いてんた 柔れの母もちが来た時にやはり等後にあって 小供を呼いで表しられませんかけど、初出考 ところど様ってるかりねるををたとるか うるーーのまなれたななないの事だける、料は門の ナラ、「しはそかだ。今日もまてるかなって、 一一一一一一一一一一 何亲往的日子自己 山とるの小供が会へた。 佐々木とる小民島で二人で表てるりかおる いると、こはにおばしました しいの供にありむいて見た、は事は私にない 素てるませんかのはと、行の中での手長者が、 トレい百姓かかり、下の同に二三軒の見すはる大花があれた。ものに二三軒の見すはいした。をして一回事はわしの説かのは、路になった。をして一回事はわしの説かの指を選がになった。初は二里近くも等のいて表を記れていいからな、明りいいからな、直くまくまくまくないととないととないととないととないととないととないととないととないととないした

の同のにに腰を下うして、私は食金素とたいとけるを、皮が経験に磨かて、昔のいてたりないなるでして、おりいとなりかの協を使ったりしとあると、かいなを表してるるを表とうった人とすいはまむきを見る、畑い大豆を放いてり人々、紹光に組をある、畑い大豆を放いてり人々、紹光に組をある、田郷豆畑ないの向を、おりてある事のと、田嶋豆畑ないの同を、おりしなり、田嶋豆畑ないの同を、おり「村り」をあるとしていると、日郷豆畑ないの同を、おり「村り」をあるとしてに用かほどしておるととしてに用かほど

22

ない屋中で富って住るひはあることを打りつか するななりなってありますかしいし りのないったでせり山とかとやして 意の指のすべ年前のとこれのない、を行からない、を行か ど、あなたか虚って来た路侵なんだが、用し とこれを上き持つと豆枝きに行ってるか 生僧介曰はまた あかりナダニヘクルで草 つたりを就子が何のナとなく益いりかとあ 在級の大豆の後のこれを後の後を上する 我中場にたかいいなか、スート眼うての いりかと 横一手とは経たるりしいまんでか 廣い板の 阿の皇外では 意かい 神んになる にいこれん 三山甘素高品人-----红美史北海鱼至事刊し 一届まるでしたか、暗聴の見まんじしたか かしなか」をあるとなるとたり 人出てあるとまです、これとは感情を動 するですか、料は連覧おりまなした。東京国 さるいする前が住人本ですが、しし」

調なすに管うたり 个目号ますかにもうとしし いたの中へ差とした。村は今に、好かほかの 除り、馬鹿を四つ五つ指すおして来る。 生しいまかった。み後たすは土肉の かないて見ると、そうなの中では旅火七暑 TO THE THE MANAGEMENT THE C A R HIGH 和任川士玄经之罪相手に儘に栄を他中し ない馬に親の手割の一般なられいとはけと行うた 国ますりめて置いて、歴め、唐書引出し大 大手不手取りにお傷を作りして茶や色像 マルツは一走り行うて素ますかり……」 小世中一十二百万七年少た。 からままのかいて下さいましたはまりました しなが、何しる大殿のたいこれかりなり、 なけ食うこないのでいつもをだしてみたので には着ってるるしですが、は独改のあなたに そんなになりますかね。私もあかのにちてい ないでせりょ何しろナ七二八章七官つした



解説 葛西善蔵原稿「姉を訪ねて」

竹浪直人

、葛西善蔵の直筆原稿発見史(昭和編

して妥当であると考えるが、状況は確実に変わりつつある。が平成から令和に改まった現在においても、その評価は依然と存している原稿の少ない作家であるという定評があった。元号、葛西善蔵(一八八七~一九二八、弘前松森町生まれ)は、現

蔵」という文章を寄稿し、次のように述べておられる。第十三号(平成十一年三月発行)に「自筆原稿が伝える葛西善葛西善蔵の令孫である伊藤彰彦氏は、「青森県近代文学館報」

でしまったのだから、当然といえば当然である。たのだろう。身一つで居所を転々と移し、有り金は皆呑んて亡くなった上に、もともと物品に執着しない性格であって重らが高い残した遺品は極めて少ない。そもそも若くし

(中略)

なく、ほとんど現存しないのだ。
ある。だが葛西善蔵の自筆原稿は、当家に無いというのでのだから、自筆原稿などは残っていてもよさそうなものでのだから、自筆原稿などは残っていてもよさそうなものなる。が説にかかわるものなるが、はとんど現存しないのだ。

葛西善蔵の作家としての活動期間は概ね大正元(一九一二)

湯元 は、 されたスクラップブックに接する機会を得、 等を通して、葛西善蔵の従弟である故・北川清蔵氏が整理収集 頃に発足した葛西善蔵文学顕彰会の活動の成果によるものと捉 十六日「下野新聞」に掲載された「〝湖畔雑記〟の原稿発見 て既に報じられていたのである。以下、昭和二十九年十一月 あることに気付かされた。実は「湖畔手記」の原稿発見の話題 えていた。しかし「葛西善蔵生誕一三〇年特別展」の開催準備 在が明らかになったのは、 かつて筆者は、善蔵の代表作である「湖畔手記」 葛西善蔵文学顕彰会が発足する一年以上前、 葛西善蔵の碑建立へ」という記事から、 弘前を拠点として昭和三十年の暮れ その認識は誤りで 一部を引用する。 栃木県におい 一の原稿の存

一の傑作といわれる「湖畔雑記」は作者三十七歳の時、大高がこの程(※筆者注…所蔵者の氏名等が記されており、中略とする)方から発見され葛西と親しかつた広津和郎、中略とする)方から発見され葛西と親しかつた広津和郎、中略とする)方から発見され葛西と親しかつた広津和郎、湖畔に記念碑を建立しようという話が持ち上つている。湖畔に記念碑を建立しようという話が持ち上つている。 は日本

(中略)

に出てくるまた碑は葛西が好んだ日光の自然石を用い、湖畔雑記また碑は葛西が好んだ日光の自然石を用い、湖畔雑記

・白根山雲の海原夕焼けて妻し思へば胸いたむなり、

む、いわば葛西自筆の碑を湯の湖畔に建てようというもと二つの歌のうち前の歌を原稿の字を拡大して刻みこ

なり、 集とどけられる」の文言が見える。これは、つる未亡人(当 学顕彰会の会長を務めることになる谷崎精二と対面を果たし たてる。」の三つの方針を確認したことが記されている。その 2葛西善蔵の人と作品の紹介を陸奥新報にのせる。 3記念碑を 昭和三十年十月四日の項には「葛西善蔵さんの奥さんから善蔵 顕彰の動きが盛んとなる。その様子は『津川武一日記 第一巻 には葛西善蔵研究会を開き、「1葛西善蔵の顕彰運動をおこす。 いる。以後、日記には「葛西」の語が繰り返し登場するように て筑摩書房の日本文学全集中の一冊が届けられたことを示して (平成四年三月、北方新社発行) によって確認することができ、 た津川武一を中心人物として、昭和三十年の秋頃から善蔵文学 弘前市内に在住)から津川のもとに、 方、 津川は十二月中旬に五日ほど上京。この間に、葛西善蔵文 十一月六日には仲間たちと碇ヶ関を探訪、十一月十二日 青森県内では、医師(健生病院院長)であり文学者だっ 同僚の仲立ちによっ

このような流れの中で、「湖畔手記」の原稿発見顕彰運動は県外にも拡がりを見せることとなった。

の湖畔手記出る 一部を碑文に」という記事からの引用である。三十一年三月二日「東奥日報」夕刊に掲載された、「葛西善蔵は、青森県内においては次のように報じられた。以下、昭和このような流れの中で、「湖畔手記」の原稿発見のニュース

者を喜ばせている。 者を喜ばせている。 者を喜ばせている。 者を喜ばせている。 本かから碑文をとることになつているが、このほど葛西 がは相当残されているが、原稿の発見され、同会ではこの なかから碑文をとることになつた。また、葛西善蔵の書簡 なかから碑文をとることになつた。また、葛西善蔵の書簡 がてといわれ、研究上にも貴重な資料になるものと、関係 がであった。また、葛西善蔵の書簡 がてといわれ、研究上にも貴重な資料になるものと、関係 がであった。また、葛西善蔵の書簡 がでといわれ、研究上にも貴重な資料になるものと、関係 ができばせている。

たものである。
にいる関係者がこれを知り弘前市の津川武一氏に送つてきり、中略とする)氏が保存していたもので、顕彰会の東京この原稿は(※筆者注…所蔵者の住所氏名等が記されてお

中略

枚目から四十三枚目までが抜けている。四百字詰原稿用紙五十一枚だが、今回発見されたものは九

(中略)

れ、はじめ『湯元湖畔にて』としたものであろう。分はハツキリ判らないが、判読すると、湯元、ともみらとなつている。また題名の上二字を消している。この部原稿によると題名は『湖畔手記』ではなく『湖畔にて』

だというのが正確なところと見られる。 ね原稿を借り出したことが記されており、 、送られたことになっているが、 ちなみに記事中では の昭和三十一年二月十一日の項には、 「湖畔手記_ 前述の 」の原稿は関係者により弘前 宇都宮に所蔵者を訪 『津川武一日記 津川が自ら持ち運ん 第

学顕彰運動に寄せる」という文章を寄せた。 その津川は、 同年三月十五日の 「陸奥新報」 一部抜粋する。 に「葛西善蔵文

碑は、 五寸の頭石をのせ、全高六尺五寸になる。 碑文は、 御影石の土台 葛西の直筆の小説の原稿からとる。 (約十二) の上に、 幅五尺に高さ三尺

碑文として予定されているのは 「自分の胸は弱い。そして痛む。 遠い郷里の老妻よー 人、 境、 倶不奪―かなし

樹木も、 自分は今ほんとうに泣けそうな気持だ。 白い雲も、薄緑の空も、そうだ、 彼等は無関心過 世も、 湖水も、

という六十九字である。

樹の若葉」、大正十三年七月「改造」 畔手記」よりも数か月早く発表された「椎の若葉」 幾部分かを僕に恵め」が刻まれた。計画に変更が生じた時期に ていたという事実である。しかし、実際のところ碑面には 筆の原稿を生かし「湖畔手記」中の一節を刻むことが構想され ついては、 フレーズ「椎の若葉に光あれ ここで注目すべきは、碇ヶ関の葛西善蔵文学碑には当初、 『津川武一日記 第一巻』昭和三十一年五月六日の項 親愛なる椎の若葉よ 第六巻第七号掲載)中の (原題は 君の光の 一湖 権 直

> 土 手記」原稿の一枚目の写真が掲載された。写真下のキャプショ 中で、「湖畔手記」の原稿が重要な役割を果たしたことは揺る 運動に関する文章等をまとめ刊行した『葛西善蔵その文学と風 後半には「原稿」の記載があり、 日)で開かれた「福士幸次郎先生葛西善蔵先生資料展」目録の 十四日~十五日)と青森県立図書館(会期は七月十八日~十九 られる。また、碑の除幕式に先立ち、弘前図書館(会期は七月 ンには「碑文の文字はこの中からひろわれた」という文言が見 善蔵文学顕彰会が発行した冊子『葛西善蔵』の口絵には ぎのない事実である。建立を記念し、昭和三十一年七月に葛西 点に対する配慮が碑文変更の陰にはあったのかもしれない。 れず、詳らかでない。ここからは筆者の推測であるが、先に と推測される。ただ、理由については、後に津川が一連の顕彰 わせると、昭和三十一年三月中旬から五月初旬までの間だった に「碑文は椎の若葉より」という一節が存在することを考え合 で「湖畔手記」の碑を建てようという構想があった訳で、その 「下野新聞」で報じられていたように、湯元温泉には湯元温泉 もっとも、碇ヶ関の碑文は しかし、碇ヶ関における建碑を中心とする一連の顕彰運動の (一九九二) 年七月二十三日 (昭和四十六年二月、 は後に次のように述懐している。平成 津軽書房発行)の中にも言及は見ら 「湖畔手記」原稿のみを素材とし 「陸奥新報」に掲載された「善 展示されたことが窺える。 一湖

蔵忌に寄せて 几 当時は弘前大学助教授) 集字を担当した故・小山内時雄氏(青森県近代文学館初代館長、 て成り立った訳ではないことを物語る資料も存在する。複写や 碇ケ関の文学碑裏話」の一節である。

になり、 **一椎の若葉」の原稿は残ってなかったので、** ペン書きの書簡から拾った。当時、 集字すること カメラは文献

ことになったのである。複写ばかりを専門にしていたから、私がそれを引き受ける

中暇)

て作字した。文字の配列にも気を配った。とくに「椎」は書簡にはなく、「木」と「隹」を別に拾っ

僕に恵め」書簡から集字。若葉に光あれ、親愛なる椎の若葉よ、君の光の幾部分かを顕彰会の手で建立される。碑文は「椎の若葉」から「椎の七月二十三日、青森県南津軽郡碇ケ関村三笠山に文学碑が

した比較調査により明らかにした。翻って言えば、「湖畔手記」はていても、「椎」と「恵」の字は拾えないということを徹底碑」―」を発行し、仮に「湖畔手記」の原稿を全ページ分所持珠「玲」別冊「碑文探索―平川市碇ヶ関三笠山「葛西善蔵文学調査成果に言及しておきたい。一戸氏は平成二十六年六月に探関連して青森県近代文学館の文学資料調査員である一戸晃氏の畔手記」原稿と、善蔵書簡の二種の可能性が考えられる訳だが、畔手記」原稿と、善蔵書簡の二種の可能性が考えられる訳だが、明書記」原稿と、善蔵書簡の二種の可能性が考えられる訳だが、明書記」原稿と、善意は、「湖畔手記」原稿と、「海神学記」の碑文の素材については「湖中学記」原稿というに、「湖畔手記」の碑文の素材については「湖中学記」原稿というに、「湖畔手記」の碑文の素材については「湖中学記」の碑文の素材については「湖神学記」の書きました。

によって成立したと見るのが妥当ではないかと考える。の碑文は、「湖畔手記」原稿、善蔵の書簡群、双方からの集字少なからず含まれているということにもなる。おそらく碇ヶ関本文には、「椎の若葉」の碑文に使われたものと重なる文字が

和六十三年三月発行)「編集後記」で、次のように述べている。り、前述の『葛西善蔵生誕百年記念展』図録には、一枚目からり、前述の『葛西善蔵生誕百年記念展』図録には、一枚目から四枚目までの写真が載っている。しかし、これは過去に撮影さ四大を出ての図版掲載であり、同展で実物が公開されたものを生かしての図版掲載であり、同展で実物が公開されることはなかった。小山内時雄氏は、代表理事を務めていた青ることはなかった。小山内時雄氏は、代表理事を務めていた青本県郷土作家研究会の機関誌「郷土作家研究」の第十六号(昭和六十三年三月発行)「編集後記」で、次のように述べている。

所在が不明になっていたからである。 年記念展が催されたのであった。この時に展示さが、三十一年に碇ヶ関に文学碑が建立された際、弘前と年記念展が催された。この記念展より小規模ではあったの記念展が催された。 出生の地弘前市で葛西善蔵生誕百

(中略)

畔手記」(原稿では「湖畔にて」)二十数枚である。「暗い部屋にて」の四百字詰原稿用紙二枚と、同じく「湖葛西の場合、原稿の所在が明らかなのは二作のみである。

(中略)

所在、現存の有無は不明であった。住所に家はなく生死、家族の住所も不明であった。原稿のこの「湖畔手記」の原稿の所有者を字都宮に訪ねたが元の

(中略)

本県においても、青森に「青森県近代文学館」設置推進

は、さきに述べたことから推知されよう。の建設が計画されている。一日も早い実現が望まれること協議会が生まれ、弘前市では図書館に付設した郷土文学館

「市がなどのではいいでは、これは「大正なできる」ででです。「暗い部屋にて」(大正九年十月「解放」第二巻第十号掲載)のなお、同文章中には善蔵の原稿で所在が明らかなものとしてむ上での原動力に繋がる痛切事だったのかもしれない。一件は、小山内氏にとって、青森県近代文学館の設立に取り組っての「湖畔手記」の原稿が行方不明になってしまったという

一、葛西善蔵の直筆原稿発見史(平成・令和編)

1日から 県近代文学館で」の中から一部を引用する。 来月「陸奥新報」に掲載された紹介記事「新たな原稿も展示 来月転換点となった。オープンに先立ち、平成十年九月二十六日転換点となった。オープンに先立ち、平成十年特別展」は一つの屋にて」が唯一という状況は十年ほど続いたが、平成十年秋、屋の善蔵の原稿で所在が明らかになっているものは「暗い部

だろう。 メーンはなんと言っても「不能者」の原稿(今回の展示のメーンはなんと言っても「不能者」の原稿

中略

されたという。

されたという。

は職から「不能者」の原稿七十枚が同寺にあることを知らに、光楽寺」のモデルとなった「常楽寺」を尋ね、現に、光楽寺」のモデルとなった「常楽寺」を尋ね、現るなくなっていた。今年の六月、特別展の準備のため別所らなくなっていた。今年の六月、特別展の準備のため別所とれたという。

中略

削るところもないのだろう」と小山内さんは推察する。中で文章を完成させてから筆を取る。だから直すところもその通りにきれいな原稿だった。苦しみ抜いて考え、頭の「善蔵は原稿をほとんど手直ししない人と言われてきた。

次のように報道された。「新資料など30点公開(1日から葛西善蔵展」の見出しの下、また、平成十年九月二十九日「東奥日報」夕刊においては、

仕事場を確保した別所温泉の常楽寺に保存されていた。これまで原稿の所在が明らかでなかったが、葛西が同年に「不能者」は、大正八年に「改造」に発表された作品。

(中略)

原稿用紙九十六枚の作品で、うち七十枚が発見された。

七十年特別展』(平成十年十月発行)には、上部余白に(不能者)地調査を行う中で発見した訳であるが、図録『葛西善蔵没後巻第五号)に「不能者」を発表した。この原稿を小山内氏は現屋に赴き三か月ほど滞在、後に「改造」大正八年八月号(第一屋の計算の場別の編集者横関愛造からの紹介で同温泉の大島

と書き込まれたページを含む写真四カットが掲載された。

るまでには九年の歳月を要した。詳しい経緯等は後述する。大書仰字詰完 二五枚 20」の文言とともに登場したということが挙げられる。この草稿が本資料集における写真版化のいかに貴重であるかということが金銭的価値によって示された低価格が二百万円であることを表しており、善蔵の直筆原稿がいかに貴重であるかということが金銭的価値によって示されたいかに貴重であるかということが金銭的価値によって示されたいかに貴重であるかということが金銭的価値によって示されたいかに貴重であるかということが金銭的価値によって示されたいかに貴重であるかということが金銭的価値によって示されたのとしては、平成二十一年七月、明治古典るまでには九年の歳月を要した。詳しい経緯等は後述する。

覧の中に、善蔵が手掛けた「父の葬式」「東北の原野を夜汽車 で過ぎる時など」「血を吐く」の三編が名を連ねていたのである。 DVD版の二種)がリリースされ、パンフレットの収録作品 て「日本近代文学館 滝田樗陰旧蔵近代作家原稿集」(Web版と レクションの中から見出されたものであり、いずれも大正期に |滝田樗陰旧蔵近代作家原稿集||解題・解説|| (平成二十三年十 中央公論」に掲載された作品であった。なお、 中央公論」 概要は『Web版DVD版滝田樗陰旧蔵近代作家原稿集 日本近代文学館発行)によって知ることができる。 日本近代文学館編集・刊行、 成二十三年には、 の名編集長として知られた滝田樗陰旧蔵の原稿コ 新たに原稿三点の存在が明らかになっ 八木書店製作・発売によっ 収録作品 (原稿) 別冊

> る。 、特殊な資料ではあるものの直筆原稿ではないので割愛すれ、特殊な資料ではあるものの直筆原稿ではないので割愛すいに同特別展では弘前市立郷土文学館所蔵の「小感」原稿も展「血を吐く」各原稿の一枚目の写真を見ることができる。ちな

書店と連絡が繋がり、交渉の結果、当館の通常の予算範囲内で **僥倖であった。このことがきっかけとなって出品者である某古** どなく『平成30年 の購入が実現した。 ペン書⑩字詰完 25枚」として登場したことは、 三十年七月、明治古典会発行)に「葛西善蔵草稿 店し、草稿「姉を訪ねて」は一時的に市場から姿を消した。ほ 前述の草稿「姉を訪ねて」は しかし、同書店は店主・八木勝氏の逝去により平成三十年に閉 ムページ上で価格二百五十万円の商品として紹介されていた。 諸原稿が「葛西善蔵生誕一三〇年特別展」に集結する一 明治古典会 七夕古書大入札会目録』 東京都豊島区の八勝堂書店のホー 当館にとって 「姉を訪ねて 方で、

く「原稿」の語を用い、原稿「姉を訪ねて」と呼ぶこととする。次節からは、草案というニュアンスを持つ「草稿」の語ではなお書店市場では、長らく草稿「姉を訪ねて」の名称で取り扱わ古書店市場では、長らく草稿「姉を訪ねて」の名称で取り扱わさまた資料であったかということは、葛西善蔵の直筆原稿発見の望の資料であったかということは、葛西善蔵の直筆原稿発見の望に原稿「姉を訪ねて」が青森県近代文学館にとって、いかに待

三、「姉を訪ねて」発表までの善蔵

前節まで、葛西善蔵をはじめ文学者には敬称を用いず、関係

く。 は多くの人名が登場することもあり、敬称略とさせていただは多くの人名が登場することもあり、敬称略とさせていただ者や研究者には「氏」を当てる方針を取ってきたが、ここから

父卯 習科を卒業した明治三十二年のことだった。 いう。 森市)に移り、さらに明治二十六年には北津軽郡五所川原村(現 道嶋牧郡本目村 北海道へと渡り、 のほか、長女いそ(十歳)、次女ちよ(六歳)の二姉が居たと 曾祖母たけ(八十歳)、祖母かよ(五十歳)、叔母あさ(十八歳 年一月十六日に弘前松森町 書房発行) いうことである。次姉ちよが北海道岩内郡梨野舞納村(現共和 した調査で確認されているのは、一家は明治二十四年には北海 所川原市)を経て南津軽郡碇ヶ関村 の村井岩次郎と結婚したのは、善蔵が碇ヶ関尋常小学校補 山内時雄編 一郎 (壬申戸籍では字一郎、 しかし、一家は曾祖母たけが亡くなった明治二十二年に 所収の年譜によれば、 (現島牧村)から青森県東津軽郡青森町 『葛西善蔵全集 別巻』(昭和五十年十月、 同年秋には弟の勇蔵が誕生した。戸籍を元に (現弘前市)で生まれた際、 三十歳)、母ひさ(二十六歳)、 善蔵 (現平川市) に移ったと が明治二十(一八八七) 家には (現青 津軽

学館大学大学部二科二年を聴講し、この年、 講習課に入学。 明治三十六年には北海道に渡り、鉄道の車掌や営林署勤務、 得たことにより帰郷、 については詳らかでないことが多い。明治三十八年に再び上京 木伐採等の仕事を経験したと言われているが、この時期の生活 栄七と知り合った。 (青森市) 平野弥亮の長女つると結婚し、 善蔵は明治三十五年に初めて上京するが、 哲学館大学 翌三十九年、 母ひさは七月に四十一歳で死去した。翌 明治四十一年三月には (東洋大学の前身) 無届欠席により除名となるが、哲 大学部第二科普通 以後は平野家に生 塗山の号を持つ佐 南津軽郡浪岡村 母 が病を 枕

稲田大学英文科の聴講生となった。介によって徳田秋声に師事することとなる。また、九月には早活費等の補助を仰いだ。同年四月、単身上京し、佐藤栄七の紹

十月には新進作家叢書第十九篇『不能者』を、いずれも新潮社 を浪岡村の平野家に託すが、三月「早稲田文学」第一四八号に 度か帰郷と上京を繰り返し、大正元年九月には舟木重雄らと同 は、 から刊行した。鎌倉建長寺内の宝珠院に転宿したのは、この大 には「子をつれて」ほか計十二篇を収めた『子をつれて』を、 発表した「子をつれて」により注目を浴びる。翌大正八年三月 さげて」(後に「贋物」と改題)を、「処女文壇」第一巻第三号 あげて上京。大正六年には「早稲田文学」第一三五号に「贋物 るまでの間に「悪魔」「池の女」「メケ鳥」の三作品を発表した。 しき父」を寄せたほか、大正二年五月号 随した何物をも犠牲にしたい」と書き送っている。その後も幾 するも帰郷しなかった。 大洗海岸の小林楼に滞在。この間、 正八年の十二月のことである。 に「雪をんな」を寄せた。大正七年二月、生計困難により妻子 人雑誌「奇蹟」を創刊。創刊号に葛西歌棄の筆名で処女作 大正四年には一時的に離婚も考えるが、 創作を志した善蔵は、明治四十二年五月から十月まで茨城 友人である光用穆に「文藝の前には自分は勿論、 大洗を引き揚げて東京に戻った際に 妻の実家で長男亮三が誕牛 (第九号) で廃刊とな 翌五年九月に一家を 自分に附

代文学館では、この北海道への旅と密接に結び付く葉書(全集譜を典拠として、善蔵の前半生を振り返ってきたが、青森県近村井ちよを訪ねた。以上ここまで『葛西善蔵全集 別巻』の年在し、十月上旬に帰郷。妻子と会った後、北海道に次姉である在し、十月上旬に帰郷。妻子と会った後、北海道に次姉である大正九年一月には「馬糞石」ほか計十一篇を収めた『馬糞石』

たものと推定できる。参考までに全文を紹介する。ので、消印こそ不鮮明だが内容から大正九年十月九日に書かれ未収録)を所蔵している。善蔵が大鐙閣の面家荘佶に宛てたも

な始末で寒いには閉口しました。十四五日頃上京します。が、連日の荒天気には弱ってゐます。昨日初霰を見たやう一二泊の予定で明日出発北海道へ行って来るつもりです御配慮有難うございました。金百円也正に落しました。

御礼迄 草々

十月九日

野弥亮方 えられる。 能性がある。また、十月九日付で「明日出発」とあることか き送った非常に珍しい書簡であるということを付言しておきた に登場する落 売していた出版社であり、善蔵は「解放」 一巻第十号)に「暗い部屋にて」を寄せていたことから、文中 大鐙閣は総合雑誌 善蔵が北海道に向けて旅立ったのは十月十日であったと考 葛西善蔵」と記されていて、 ちなみに差出人の情報は (手) した「金百円」は、その原稿料だった可 「解放」(大正八年六月創刊) を発行 「青森県南津軽郡浪岡村平 善蔵が妻の実家から書 一大正九年十月号 販販 第

に掲載されたのは同年七月のことであった。 ・おれて」が成ったのは大正十年六月、「人間」第三巻第七号を訪ねて」が成ったのは大正十年六月、「人間」第三巻第七号を訪ねて」が成ったのは大正十年六月、「人間」第三巻第七号を訪ねて」が成った。 ・海道からの帰途、善蔵は郷里に寄り長男亮三を同道して上京。再び『葛西善蔵全集 別巻』の年譜を元に話を進めるが、北

四、原稿「姉を訪ねて」について

に基づく小説であることは言うまでもない。れている。大正九年十月に次姉ちよを訪ね北海道を旅した経験には、「姉を訪ねて(小説)……………葛西善蔵」と印字さ大正十年七月一日に発行された「人間」第三巻第七号の目次

た分の原稿から随時、主幹の滝田樗陰に渡していたことが窺え 善蔵の「血を吐く」を担当した際、全体の完成を待たずに書け 陰とその時代』(昭和四十年十二月、図書新聞社発行)からは、 り)が見られることと結びつけて考える必要がある。ちなみに 枚目に直しを入れることはできなかった可能性がある。 る。仮に「姉を訪ねて」においても同様のスタイルが取られて 余白に「題は『姉を訪ねて』」の書き込み(斜線での消 いたとすれば、善蔵本人は標題を変更することを決めても、 「中央公論」記者だった木佐木勝が著した『木佐木日記 によるものかどうかは微妙な所ではあるが、十六枚目の右側 た「汚染」の左隣に書かれた「姉を訪ねて」の文字が善蔵の手 は標題は「汚染」だったという事実である。軽く塗りつぶされ 原稿の一枚目を見て真っ先に気付くのは、 書き始めの時点で 滝田樗 こし跡あ

な不安に襲はれ勝であつた。それほど私の心も身体も弱つてゐ稿一枚目のうち書き出しの一段落を翻刻すると、「その時分私信得体の知れない暗い不安に悩まされてゐた。生の自己破壊、は得体の知れない暗い不安に悩まされてゐた。生の自己破壊、は得体の知れない暗い不安に悩まされてゐた。生の自己破壊、なるか、それとも近いうちに死ぬるのではないかと云つた外私のるか、それとも近いうちに死ぬるのではないかと云つたやうゐるか、それとも近いうちに死ぬるのではないかと云つたやうなった。と、「その時分私を不安に襲はれ勝であつた。それほど私の心も身体も弱つてゐるか、それとも近いうちに死ぬるのではないかと云つた。とれほど私の心も身体も弱つてゐるか、それとも近い方法に関すると、「表述」に表述している。原本は、「表述」に表述している。

であっても、さほど違和感は無いように思われる。は淋しかつた。」となるが、この部分だけを見れば標題が「汚染」た。誰か明日の運命を知ることが出来るか――さう思ふと、私

離したことによる変更だったのかもしれない。 おそらく標題が途中で「姉を訪ねて」に変わったことの要因は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善蔵の小説に対する考え方と関わりがある。「葛西善蔵氏は、善したことによる変更だったのかもしれない。

思稿三枚目では「十七八年も会はない姉に会つて此世の暇乞 出発の際の様子が描かれている。 出発の際の様子が描かれている。 出発の際の様子が描かれている。 出発の際の様子が描かれている。 出発の際の様子が描かれている。 出発の際の様子が描かれている。 出発の際の様子が描かれている。 出発の際の様子が描かれている。

ねた | 毛布にくるまりながら船室の丸窓から山のやうに大きくうねつ てゐる蒼い波の上に雪片の散るのを、 かなり苦んだものである。 記憶はほとんどない。二度目は十七の時で、その時は友達と二 産時代に一家を挙げて後志国の寿都に避難した。がその時分の これで三度目であつた。最初は私の三つの年、 稿五枚目(一~十一行目)には「私がこの海峡を越えるの ―」という述懐が登場する。不明な点が多い、 冬で海の荒い時節だつたので、 哀しい思ひ出である。 恐怖と驚異の眼で眺めて 室蘭までだつたが 私達は一枚の 私の家の倒 善蔵の北

海道時代の一端が垣間見られる場面として注目される。

が存在することの大きな意義と言えよう。 とは明らかであり、このような照合が可能になることは、原稿 されたものである。「げ」 に登場する「明日の朝よく訊いてあげますさ。」という宿の女 じていたことが窺い知れる。また、原稿十五枚目(一~二行目) これは初出本文では「北海道らしい粗野な沿線の風景に、多少 線の風景は、多少の興味をひいた。」という一節が見られるが、 呼ぶことにする)では「船か桟橋に横付けになり」と印字され されているが、これは の言葉は初出本文では「明日の朝よく訊いてあけますさ。」と の興味をひいた。」となっており、「は」から「に」に誤植が生 た、同じく七枚目(五~六行目)には「北海道らしい粗野な沿 たもので、「が」から「か」に誤植が生じたことが分かる。 原稿七枚目(一行目)には 「人間」掲載の本文(以下、初出本文と から「け」への誤植が起きていたこ 「船が桟橋に横付けになり」と記 ま

沸かして、 もの 二十四枚目(九行目)の『それでは一走り行つて来ますから ものも認められる。原稿十九枚目(十八~十九行目)に登場す まま続けられることとなった。原稿と初出本文との相違につい 馬に縄の手綱の鞭を呉れて駈けて行つた。」という一文がその ……』という義兄の言葉の直後には改行と一字下げが見られる や豆畑の間を」とされ「など」は消失した。このほか、 れる「田や豆畑などの間を」という文言は、初出本文では「田 は消えた形となった。また、原稿二十一枚目(二行目)に見ら では「小学校の前を左に曲るやうに」とされ、 る「小学校の前を左りに曲るやうに」という一節は、 誤植とはやや異なるが、活字に反映されなかった言葉という 0 初出本文では改行は施されず「大きな手取りにお湯を 茶や座蒲団をすゝめて置いて、 厩から引出した裸か 送り仮名の「り 初出本文

ては、 漢字の字体の違いを除けば、 以上で概ね網羅できたと考

眺めて、 柴を燃やしながら、 の中へ差込んだ。私は今に、姉やほかの甥たちに会つたら、今 ふ義兄の話にも、 に話しかけたり、門口に出て土方たちの忙しく働いてゐるのを 日すぐにも引返してもい、と云つた満足した気持で、子供たち けての最終段落を翻刻すると「私は小さな姪と甥相手に、炉に 場面そのものは描かれない結末となっている点を吟味した 原稿二十四枚目 もう家の中では、 土間の隅から馬齢薯を四つ五つ持ち出して来て、 今明年中にまた五町歩位ゐ畑を水田に直す計画だと云 私は満足を感じた。」となるが、姉との再会 (十四行目) から二十五枚目 姉の帰りを待つてゐた。 焚火も暑苦しい気がしなかつた。子供た 汗が乾いて見る (五行目) 熱い灰 にか

筆跡によって味読できることの意義は極めて大きいと考える。 善蔵作品の中では、特に処女作である「哀しき父」において強 大正文壇において私小説・心境小説の第一人者と目された葛西 た「私」が、いつしか満足感に包まれているという展開には もなく葛西善蔵の作風が発揮された小説と評価できよう。 く認められたものである。その意味で「姉を訪ねて」は、 冒頭では「汚染」の標題が相応しいような心理状態にあっ 0 の面目躍如たるものが感じられる。この作品を善蔵本人の 肝心な事柄は描かず敢えて空白にするという手法は、 そし 紛れ

「姉を訪ねて」発表後の善蔵

食事を取り寄せてのものだった。運び役は「おせい」の名で作 長寺内の宝珠院での生活は、 参道沿いの茶屋・招寿軒から

> 品にも描かれた茶屋の娘、浅見ハナが務めていた。ここからは から、大正十一年九月には「不良児」ほか計十五篇を収めた『哀 『葛西善蔵全集 別巻』の年譜を元に善蔵の後半生を概括する。 大正十年十一月には新興文藝叢書第十八篇『贋物』を春陽堂

住んだ。 移った。昭和二年十月、 には世田谷三宿一二二番地に移った。七月に帰郷し石坂洋次 号に発表。三月、浅見ハナとの間に三女ゆう子が誕生し、 滞在。十一月には「湖畔手記」を「改造」第六巻第十一号に発 と移り、浅見ハナと同居するに至った。大正十三年七月、 年に帰郷した。同年九月一日、宝珠院で関東大震災に遭遇し、 に入ったが、 郎の世話で弘前市元寺町の齋吉旅館に滞在。十二月には三宿 第六巻第七号に掲載される。九月、湯元温泉に赴き板屋旅館に の口述を古木鐵太郎が筆記して成った「椎樹の若葉」が「改造 しき父』を改造社から刊行。同居していた長男亮三は大正十二 一二五番地に移り、 命を免れて上京。下戸塚の後楽館から本郷区弓町の西城館 大正十四年一月、「血を吐く」を「中央公論」第四十巻第一 短篇シリイズ第四篇 十二月に弟勇蔵の四十九日で帰宅した後は三宿に 翌大正十五年七月には三宿一一一番地に 胸部疾患が進み七里ヶ浜の鈴木療養所 『椎の若葉』を新潮社から刊行した。 四月

第一 の間に四女久美子が誕生。七月十日に改造社版『葛西善蔵全集 昭和三年一月から従弟の北川清蔵が同居。 巻を刊行し、七月二十三日午後十一時八分に永眠した。 几 月、 浅見ハナと

る。 を受けた令姉が北海道から到着し、善蔵と会う場面が存在す 葛西善蔵』 善蔵に師事した佐佐木千之が、 (昭和十八年六月、 学藝社発行) 約十五年を経て著した小説 には、 危篤の電報

「どうして、きたの。電報でも見たの。」

と、きいた。

くつて……。」「いいえ、電報も何も見ないけれど、ただ兄さんに逢ひた

剛杖のやうに痩せ細つた、その手首をさすつた。骨肉を分けた弟の善蔵氏を何故か兄さんと呼び、そして金老けて見える、朴訥な中年の令姉は、十数年ぶりで相見ると、畳に膝頭で立つたまま、小柄な令姉はこたへた。遠

一人で、きたの?」

病人の声は低く嗄れてゐた。

一人で、きました。」

くがこぼれるのを私は見た。――と、そのとき、落ち窪んだ葛西さんの眼から、しづ

うものを本資料集で感得していただけたら望外の喜びである。九月に佐佐木が「中央公論」第四十三年第九号に寄せた「死の乱と問辺の文献が結び付いて重層的に響く、私小説の魅力といる。「姉を訪ねて」の後日談とも言える再会の様子は、実は晩高と問辺の文献が結び付いて重層的に響く、私小説の魅力といれる。「姉を訪ねて」の後日談とも言える再会の様子は、実は晩れりに佐佐木が「中央公論」第四十三年第九号に寄せた「死の九月に佐佐木が「中央公論」第四十三年第九号に寄せた「死の九月に佐佐木が「中央公論」第四十三年第九号にある。

め、ルビや傍線、傍点は省略した。 ※引用・翻刻に際し、漢字の旧字体は原則として新字体に改

(青森県近代文学館文学専門主幹

葛西善蔵・原稿「姉を訪ねて」資料集 第十二輯

発行日 令和三年三月三十日

発編 行集

青森県近代文学館【青森県立図書館内】

青森コロニー印刷 TEL 〇一七(七三九)二五七五 TAL 〇一七(七三九)二五七五

印 刷

禁無断転載